

イエス様が十字架にかけられて、墓に葬られた3日後、週の初めの夕方はイエス様が復活した喜びの日なので本当は素晴らしい日だったはずですが、でも、弟子達はイエス様が死んでしまい全てが終わったと思いきや、イエス様が捕らえられた様に次は自分たちが捕らえられるのではないかと恐れて、戸の鍵を閉め、息をひそめ隠れていました。マグダラのマリアは、空っぽの墓の前で天使に主が蘇られたという復活のニュースを聞き現れたイエス様に、私にしがみついているとはいけない、早く弟子達の所に行って復活の事を伝えるようにと言われ伝えに行きますが、弟子達は信じる事ができません。弟子達は良い時にはイエス様の為なら死んでもいい、従いますと言っていたのに、最後にイエス様を知らないと言ひ、裏切ってしまったので恐れていたのです。

二つの平安

復活の体となったイエス様は戸が開かなくても弟子達の部屋に入ってくる事が出来ました。弟子の前に立ったイエス様は「平安があなた方にあるように」と言われて、一人一人に手と脇腹の傷を見せました。十字架にかけられたイエス様の体は全身傷だらけだったのに、復活されたイエス様の体はきれいになっていて、残っていたのは十字架の上で受けた傷だけでした。弟子達はイエス様を十字架にかけたのは群衆やパリサイ人だと思っていました、イエス様が手と脇腹の傷を見せてくれた時に、自分達の失敗や裏切りの為に十字架があり、「父よ、彼らをお赦し下さい、彼らは何をしているのかわからないです」との祈りは自分達の為だったとわかりました。自分たちは赦されていたのだと分った弟子達は恐れが消えて喜びを頂いたので、イエス様は、もう一度、平安があなた方にある様にと言われます。イエス様は2つの平安(シャローム)をくれました。1つ目は、恐れに満ちていた弟子達、私達に対してでしたが、2つ目は、不安や恐れに満ちている沢山の者の人達に対して、出て行ってこの平安を与えなさいという命令でした。

聖霊を受ける

弟子達は、このまま出ていっても力がなくて恐れてしまい、何かあれば裏切り、失敗してしまうので、聖霊の力を受ける事が必要でした。イエス様は弟子達に息をふきかけて、「聖霊を受けなさい」と言われました。これは、使徒行伝の約束の御言葉「聖霊があなた方の上に臨まれる時、あなた方は力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、及び地の果てまで、私の証人となります(使徒行伝 1：8)」が現実となる為のデモストレーションでした。復活の日にイエス様が息を吹きかけられて力を受けなさいと言われたのは、この事だったのだと、弟子達はペンテコステの日にかわったのです。

罪を赦す権限

「あなた方が誰かの罪を赦すならその人の罪は赦され、あなた方が誰かの罪をそのまま残すなら、それはそのまま残ります。ヨハネ 20：23」イエス様は弟子達に人々の罪を赦す権限を与えられました。私は、貧しい家庭で育った為、盗みをし、酒乱の父親の事を恨んで憎んで育ちましたが、教会に1年通って、十字架が自分の為だったと分りました。汝の罪は赦された、安らかに行けと、手を置いて祈られた時に自分が赦された事がわかりました。それは祈ってくれた牧師先生に赦されたというのではなく、神様に赦されたことと分ったのです。神の恵みによって愛する人の為にあなたの罪は赦されましたという権限が私達にも与えられています。反対に、誰かの罪をそのまま残すなら、その人の中に、又その人を赦せない罪が自分の中にも残ります。

赦せないという罪 = 心の傷

私達は人を赦せないという罪を持っていて、それが傷として残っています。私は父親が酒を飲んで暴れるとガラスも割られて家はぐちゃぐちゃになり、弟や妹を連れて夜中に交番に逃げ出し、朝になって帰ると父親は大の字で寝ていて、母親

は泣きながら掃除をしているような事が何度も繰り返される様な貧しさのどん底にある家庭で育ちました。夜学高校に行く事さえ出来ず、中卒で就職しましたが、その会社で私を指導してくれた技術指導員の上司が、公の場でも私はクリスチャンですとはっきり言われる様な、昼休みの食事が終わると、会社の地下室で祈っているような人で、私は彼に会社の聖書研究会に連れて行かれる事になりました。この会社の聖書研究会は72年間、今も続いています。彼は「私の職場から伝道者が出ますように」と祈っていました。彼は定年まで働きましたが、私がこうして牧師になっています。他にも何人も伝道者が出ました。御言葉と祈りは絶対的な権限があります。私は経済的に家庭を支える必要性があり、8年間働き、逃げる様に家を出て、仕事を辞めて神学校に行きました。神学校に行きながら毎日家族の救いの為に必死で祈り、最初に父親が神学校3年の時に54歳で病気で倒れた事をきっかけに救われました。父親と和解も出来、その後父は天に召されました。でも、私自身の子供の頃に受けた心の傷が癒されるのにはイエス様を信じてからも長くかかりました。イエス様を信じて父親の事も赦しましたが、父親から逃げて、助けてと言っているが、自分はなかなか前に進まず、父親に追いつかれてしまう夢を見ていて、それは結婚してからも続いていました。夜中に悲鳴を上げて飛び起きるので、妻も驚いていました。牧師になってからも続き、結局50歳すぎまで卒業出来ませんでした。長く続いた事には意味があったと思います。今、幼児虐待が社会でも問題となっていますが、虐待する親自身も虐待された中で育ち、そうならざるを得なかった事、自分も同じようにしてしまうものを自分の中に持っている、クリスチャンになれず、癒されなければ自分も同じ事をしていたと示されました。ある日、妻がオリーブ油を私に塗って泣きながら祈ってくれ、その後、久しぶりに父親が夢に出てきました。でも、その父親は酒乱ではなく、若くて両手を大きく広げて私に近づいてきて、「いつお、大丈夫か」と言ってくれたのです。私は夢の中で父の懐に抱きついて泣き、自分の泣き声で目が覚めました。本当に神様の為さる事は時にかなって美しいと思います。あなたが、誰かの罪を残すなら、そのまま残りますが、大丈夫です。そのまま残っていても、必ず癒しの時が来ます。

信じる者となる

トマスは、他の弟子たちがイエス様に会ったと聞いても、イエス様の傷跡に指をつっこまないと自分は信じられないと言いましたが、彼は疑い深いのではなく、これが彼の信仰だったのです。彼は本当に信じたかった、中途半端に信じたくなかったのです。礼拝は復活のイエス様に会う場所。イエス様を霊の目で見る為のものです。トマスは復活されたイエス様が最初に弟子達の所に現れた時に一緒にいませんでしたが、8日後にもう一度イエス様が現れた時には一緒にいて、イエス様から「あなたの指をここにつけて私の手を見なさい。手を伸ばして私の脇に差し入れなさい。信じていない者にならないで、信じる者になりなさい」と言われました。たとえ、前の週にいらなくても次の週に前の週の恵みも一緒に注いで下さる素晴らしい主です。こんな私が本当に天国に行けるのだろうか、本当に赦されているのだろうか、沢山失敗もし、主の心を痛めてしまうような言動をしてしまった事も沢山あるし、とふっと思う事があります。でも、行いによっては誰一人天国には入れません。ただ、信仰によるのです。それは、誰一人誇る事がない為です。イエス様の前に立った時に、残された傷跡を見せて、私達に平安あれと言ってください。残された傷跡は私達に対するイエス様の愛の証なのです。

(要約者:日名 陽子)

(2019年4月21日)